

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

近代日本語文学における〈文学場〉の成立

—言葉を分有する方法—

氏 名

杉 田 智 美

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論は、1900年前以降の書き言葉としての日本語が、「文学」という枠組みを与えられた際、どのようにそれを成立させる場を形成したのかについて、いくつかの事例によって考察したものである。いわゆる文壇や文学サークルという「文学」に直接に関わった人たちだけでなく、近代日本語が書き言葉としての定着をはかった時に、どのように文壇以外の社会と関わっていったのかについても可能な限り留意した。「文学」という枠組みが形成されていく過程で、いわゆる文学作品を読む、読まないに関わらず、日本語社会にどのような影響を与えてきたのかを考える立場をとっている。

まず第一部では、「文学」を成立させるための言葉が、それを書くという行為を通じて階層化されていく過程を追う。

第1部の第1章では、1900年以前から新たな局面を迎えていた日本語の言文一致運動、とりわけ話し言葉を写す方法に着目して、「標準語」の亀裂としての口語を考える。文学的トピックでもあった「写生」という営為を通じて行われる「記録」とは、いったいどのような意味をもっていたのか。この場合の記録する主体は、記録される対象との関係の中で、どのような位置を占めることになるのだろうかという問いをたてた。口語の記述に大きな影響をもった雑誌『ホトトギス』のメンバー、とくに坂本四方太を中心に考察している。四方太は『ホトトギス』の中でもとくに口語の記録と、散文の言文一致に関して、いくつかの実験的記録文を残している。1897年に正岡子規が松山で立ち上げた雑誌『ホトトギス』は2年足らずで東京に拠点を移し、定期的に音読披露や、実際の会話を時系列に沿って記録していく写生的方法の模索が続けられていた。こうした過程で、四方太は会話の「今、ここ」を写すことを通じて、口語文体の揺れと位相語としての「東京語」を発見している。東京語＝標準化を一般化していく側（本郷文化圏）に属した四方太が、方言や下層社会の口語に着目し、それを再生していく行為は、「国語統一」という趨勢の中で、いったいどのように機能したのかについて考察を行った。

2章では、1章で問題にした坂本四方太から10年、同じく『ホトトギス』を足場として、山会の音読会から出発した小説家、夏目漱石をめぐって考察している。イギリス留学という英語圏での滞在を終え、日本の唯一にして最高学府であった東京帝国大学から離れ、漱石が新聞社専属の書き手となるのは1907年のことである。最初に新聞に発表されたその小説には、漢詩の絶句と「普通の文章」をスイッチさせながら日記を書ける人物や、婚約者に英文学を個人教授する男とその友人たちが登場する。最初の長編新聞小説となった「虞美人草」(1907年)である。同じ家に起居しながら、兄は漢詩漢文の素養を背景に持ち、妹は英語という近代化の象徴的言語によって、家の継承をめぐって一見兄と拮抗する力関係を構成してみせるが、このテキストの最後に用意されているのは、言語規範を主体的に形成し得た男性と、近代化の「余剰」として英語を移植される女性とが善悪で判断されていく結末である。この小説が、明治後期から大正期を代表する作家の新聞小説として、日々更新されていたことが、どのように日本語における階層性を表現しえたのかについて考えてみる価値はあるだろう。

また3章では、引き続き「虞美人草」の分析を通して、男同士の絆(K・セジウィック)が登山とそれによって得られる、「分有」の確認行為であったことを指摘している。そこで分有されるのは、1900年代に学生、とりわけ高学歴男性たちの間で流行した登山とそれによって得られる空間認識、またそれと同様に疑似的兄弟の関係を結ぶための一人の女性であった。

「虞美人草」に限らず、漱石の描く小説群の男性中心主義については、多くの指摘があるが、彼等男性たちの出自のもっとも顕著な場である本郷文化圏、東京帝国大学の中の階層性については、ほとんど言及されなかったのではないだろうか。〈本郷文化圏〉という言葉でテキストの内部を見渡すことを通じて、明治、大正、昭和へと続いていく知の体系の形成し、戦後にまで及ぶ帝国日本の中心となった人脈図や彼らによる功罪が明らかにされてきたことは否めない事実であろう。けれども一方では、その知の権力が生起する場が、ある場合には、一枚岩的な男性／女性の関係を、阻害する者／される者との二項対立的な構図に囲い込んできたという問題もある。前章でみたように、明らかに位相語として抽出できるような場合以外でも、存在する別の階層性について、〈本郷文化圏〉内の人物分析を詳細に見直すことで、明らかにしようとしたのが第4章である。

第4章で扱う「三四郎」(1908年)には、「虞美人草」と同じく数多くの男性たちが登場する。そこに登場する男性たちの多くは、一人を除いては、身边におこる出来事を世界の外側から概観し、あるいは自己の世界に引きこもる男性たちの集団である。彼らが集う東京帝国大学という権力の場において、書くこと(あるいは書かないこと)がどのような階層性をもたらしているのかについて考えることは、階層化された特権的な言葉を発見することでもある。

表象される対象とそれを創る側の関係性に注目すると、質量ともに、圧倒的に女性が支配される側に置かれるケースが顕著になる。男／女に分類できない主体に焦点を当てる方法もあるが、性に限定された表象が前提とされた中で、より鮮明にその非対称性が明らかに確認できる場合を例に、女性の身体が再生されていく場について考察したのが第5章である。

第5章「再生される身体——泳ぐ女たちのモダニズム」では、個人の身体が社会的規範の秩序の中に取り込まれ、規格化される様子がさまざまなメディアに投影されている状況を確認する。これまでの社会の中になかったような大きなスポーツイベントをきっかけに、とりわけ女性の身体は見られる対象としてオブジェクト化され、規格化される状況を顕著に見出すことができる「場所」である。オリンピック報道の過熱の過程で、近代化を契機としてスプロール化していく都市空間や資本構造の変化によって、身体の資本化と、文字通り分有へと追い込まれていく状況が、岡本かの子「渾沌未分」（1936年）の中で確認できる。取り換え可能な、アイデンティティを保証されるべきはずの身体が再現される過程でおこる主体の剥奪に対して、近代化しきれない身体が、どのように抵抗の痕跡をみせるかが、ここでの考察の中心である。

第二部では死んだ後に出版される「遺稿集」について考察した。近代以降、印刷技術の変化と教育普及によって読み書く人々が増加し、それに伴い「読者」は近代以前と質量ともに大きく変化していく。木版、手製本、ある程度限定された中で行われていた時代には考えられなかったような出版環境の到来によって、質量の両方が変化していく時代でもある。前章で見た〈本郷文化圏〉に集う学生たちの場にも、そうしたプロの書き手以外による、集団によって形成される出版物があったことが確認できる。その一例として、第6章では、東京帝国大学予備門としての役割をもった第一高等学校の『校友会雑誌』の検討からはじめてみたい。東京帝国大学出身の作家たちの何人もが、在学中にこの雑誌の書き手、あるいは編集委員として積極的にかかわっている。そのうちの一人が、魚住折蘆（影雄）（1883～1910年）である。第一高等学校在学中から、『校友会雑誌』の積極的な書き手であり、文芸委員であった魚住は、東京帝国大学時代にF. ケーベルらの下で美学哲学を学び、哲学科を卒業後は朝日新聞に評論を連載し、美術評論雑誌『美術新報』社でプロの書き手になるが、卒業後わずか1年で他界する。生前彼が書き残した評論エッセイは、美術分野に限らず、『校友会雑誌』時代に書かれた校風問題や藤村操の自殺に関わる国家と個人のあり方をめぐる評論、自然主義批判など、広範囲に及ぶ。いわば、これからを囑望される書き手の夭折という事態が、周囲の人間たちを動かして出来上がったのが『折蘆遺稿』（1914年）である。

遺稿集とは、死後に関係者によって編まれる、近代以前から続くジャンルを横断するテキストの集合体をさす。故人の「関係者」—ある場合には近親者であり、別の場

合には和歌の宗匠や宗教家、思想家などの師弟関係にあった者たち一が、その編纂に関わっていく。遺稿集の最大の特徴は、著者がその書物の成立に絶対に関与することがないという点にあるが、特に著者名に記されたその死者が、どのような関係者によって、また何を目的にまとめられるかによって、大きな異なりを見せる。

著者の死後にしか遺稿集が編まれないという、一見当然の、同時に不思議な事実は、私たち読者が、著者をその書物の完全な支配者であり、作者がその書物の全体に関与していることを前提としていることに気づかされる。ここで扱う『折蘆遺稿』という遺稿集の最大の特徴は、一度公表された署名入りのテキスト以外にも、おびただしい数の書簡が収録されている点にある。また夭折したために、折蘆のありうべき未来、書かれるはずだったテキストは、彼の遺した友人宛書簡の書簡という生々しい声が補填されることで完結する。〈遺稿〉が、死ぬことで完結される彼の全人格の投影という手続きを経てもたらされるものであり、読者によって「再生」される行為がそこに介入するということを指摘した。そもそも魚住が批評その他を公表した媒体が『校友会雑誌』という閉鎖空間だったことにも注目した。一般的な読者が想定される新聞や雑誌ではなく、学閥とジャンルの偏向した同人的意識の強い閉鎖的な空間によって生み出され、そこに集う人物たちによって読み書かれたテキストであったことも、『折蘆遺稿』の特別な〈文学場〉の性質を大きく規定している。

第1章で見たように、坂本四方太が市井の人の日常の語りという文学的方法で他者の声を写し取ったのと同様、魚住折蘆の言葉は、美術評論や『校友会雑誌』という枠組みを超え、死後にそれを編む人々によってトレースされ、反復される場が与えられた。それによって形になったのが『折蘆遺稿』である。ここでは『折蘆遺稿』が、折蘆と帝大で友人関係にあった岩波茂雄、(のちの岩波書店店主)が最初に出版した単行本であること、ほぼ同時期に夏目漱石の小説『こころ』(1915年)という、死後の語りで占められる書簡体小説が同じ岩波書店から刊行されていることとの関連の中で見る。これらを結び付けて考えることで見える、死者とその言葉をどのように再生していくのかという課題は、同時代の文学的流行(自然主義による真実の暴露、告白という装置、私小説的語りの定着)を背景にしてしか考えられない。そこではやはり本郷文化圏という、ホモソーシャルな共同体が形成する、特別な〈文学場〉が背景にあることを確認できた。

第7章では、6章でみた〈遺稿〉という死者の再生装置が、閉鎖空間的語りを保ちながら、一方でその語りの真実性や普遍性を〈文学場〉のなかで獲得していったという仮説をもとに、夏目漱石の死を巡る文壇ゴシップ小説「破船」(1922年)を分析した。固有のテキストが文壇ゴシップ情報を取り込みながらテキスト化されていく文学場の状況についてはいくつかの言及がある。ここで扱う久米正雄の「破船」は、そのモデルである「夏目漱石」を取り巻く文壇小説であると同時に、作家が自らの身辺情

報をもとに描く「身辺小説」として位置づけることも必要であり、文壇作家の文学史的な位置づけや自然主義からの影響に加えて、読書空間の変容、雑誌メディアを取り巻く問題として認識されている。本論では、読者には真偽の確認不可能な身辺情報によって身辺小説的テクストを成立させる問題としてではなく、小説をはじめとする文学テクストがどのように「真実らしさ」を獲得できたのかという問題としてとりあげた。小説内部の「実在した」（という前提で読ませる）人物が握っている「空白」の心理が、完全に検証不可能になった時に、それを真実であるかのように「錯覚」し、文学を読むという行為をそうした「真実」を求めて読むこととは、どのような〈文学場〉のなかで生じているのかについて考察した。また、死者とその継承者という関係の中で作られた、もの言うことのできなくなった人の言葉を1冊の書物にすることは、あらゆる意味で政治的である。そして、そのテーマが恋愛や結婚という異性（＝女性）を対象化する、一方的な性（＝男性）の語りによって形成されている点を、父権的支配—父夏目漱石から、未来の夫になりそこなった久米正雄へ—の物語として描かれている点にも注目した。

第6章でとりあげた『折蘆遺稿』が、出身大学やその周囲の文学者を中心に広がりをもたせたとすると、7章は「夏目漱石」そのものが一つの〈文学場〉のような働きをもたらしていた点を指摘した。続く8章は有島武郎の妻である有島安子の遺稿『松むし』を取り上げた。『松むし』は、きわめてドメスティックな遺稿である。折蘆の場合と違い、有島安子は、文壇内の人間でもなければ、死ぬまで公にされたテクストをもたなかった人物である。極論すれば、娘と、夫有島武郎の妻として「記憶」された「記録」として『松むし』は存在する。しかしそれが書物の形で残され、夫有島武郎の作家活動の一部として存在することの中には、死者の言葉をどのように記録し、再生するかという、遺稿集全般に関わる問題を抽出することができる。二度と主体的に語りえない存在である著者が、「遺稿」という枠組みを与えられて再生されるとき、そこには書き／語る主体の代行者が関わらざるを得ない。そして必ずその代行者は、亡き著者との関係において、代行するという行為を通して、特別な関係（ここでは、モノガミーな愛の信憑性）を形成することになると結論した。

第三部では、第一部の近代日本の〈文学場〉を形づくる文壇内部からの力と、その際に階層化され、主体化された対象と、第二部で見た、失われた主体の再現をめぐる考察に基づき、言葉を書く主体がどのように「語る権利」を与えられ、「本当の主体」として強固な真実性を与えられていくかについて、考えている。特にこの第三部では、1945年以前に、日本が旧植民地で展開した同化政策の中で、「日本」に編制されようとしていた「他者」をどのように記録し再生するかを追った第10章、および日本語を積極的に習得し、母語を日本語にもつという他者性よりも、主体的に日本語を選び取

る身振りで、自らの声を再生していた人々の記録に注目した。

第9章「知里幸恵、〈民族〉を記憶する場所」では、アイヌのコタンに潜入する2人の青年に注目する。1人はコタンに潜入し、アイヌの古老の様子を一枚の絵にした青山熊治。そしてもう1人は、アイヌ語の研究と収集を目的として入村した金田一京助である。彼らはそれぞれ芸術と学術という、それぞれの目的によって当時内国植民地となった北海道に渡って、その目的を遂行している。身体と言語という、個々の人間にとって取り換える事の出来ないアイデンティティが、異なる文化を背景とした人によって表象されるとき、そこには表象する側の欲望が映し出されることになる。そしてその中に描かれた対象を意味づけることは、二重の表象を意味すると結論づけた。

第10章は、柳宗悦の1920年代の「朝鮮」をテーマとする言説を通じた、「語りの主体化」と「文学場の政治性」の関係性についての一考察である。サイードが『オリエンタリズム』(1986)で提起した権力と知識との癒着の問題は、文化を語る主体を前景化した。現在の表象文化研究の成果を踏まえて見たとき、サイードが表象そのものの暴力性について充分自覚的であったかどうかについては、検討の余地がある。G・C・スピヴァクは、第三世界におけるサバルタンに目を向けることで、植民地支配を受けた対象が本質化されてきた事態を「行為体/エイジェント」という概念を通して、それこそが別の主体によって創造(捏造)された実体化できないものであることを指摘した。第三世界のみならず、あらゆる国家や民族、性、経済的格差など、あらゆる階層化によってもたらされる「従属的地位にある人々」の定義を援用するならば、1920~30年にかけて「朝鮮芸術」について論じた柳宗悦の複数のテクストには、それを造り出す人々への「共感」と立場の「共有」の痕跡が散見される。いわば柳にとっての「朝鮮人」とは、語りえないがゆえにそのサバルタンとしての内面を補完し言語化すべき対象として意味づけられていたと指摘し、その上で内面の補完と代弁という行為の検討を行った。その例として、常に論点の一つとなる1919年3月1日の独立運動と日本軍による武力鎮圧をきっかけに始まったとされる、柳による「悲哀の人々=朝鮮人」という認識の検討からはじめ、柳や有島武郎など、白樺派に共通するヒューマニティの方法について論じる。植民地支配を拡大していく帝国日本と、その周縁に位置づけられた外地へのまなざしの性質、それらが現在では映画や展覧会などのメディアを通じても反復されている点を指摘した。

第11章「黄氏鳳姿、〈台湾の少女〉を語る」では、さらに1930年代から40年代の事例の一つとして、植民地台湾で「綴方少女」と呼ばれた黄姿鳳姿に焦点を当てた。日本の赤い鳥運動との連動を背景にして見る時、同化政策によって日本語を国語として学ぶことになった黄氏鳳姿が、どのような文壇力学の中に置かれていたかが明らかになった。決して文壇内部でプロの書き手となることはないポジションから、「彼女自身」が綴った言葉が彼女をどのような主体として再生していったのかについて考えた。